

- 問1 弥生時代の祭祀で使われた青銅器のうち、釣鐘のような独特の形状をした道具について述べた文として、最も適切なものはどれですか。 (2026年 滋賀県公立入試 類似)
- 非常に鋭い刃を持ち、敵と戦うための武器や木材を加工する工具として使われた。
 - 表面に当時の狩猟や農耕の様子、生活風景を反映した文様が刻まれている。
 - 土でつくられ、古墳の周囲に並べることで死者の霊を慰める役割を果たした。
 - 仏教の伝来とともに寺院に設置され、人々に時刻を知らせるために打ち鳴らされた。
- 問2 表面に当時の生活の様子や動植物、流水文などの模様が描かれ、上部に「鈕（ちゅう）」と呼ばれる持ち手のような部分がついている、弥生時代の祭祀用青銅器の名称は何か。 (2026年 新潟県公立入試 類似)
- 銅鐸
 - 埴輪
 - 銅矛
 - 銅戈
- 問3 3世紀の倭（日本）において、邪馬台国の女王である卑弥呼が中国の魏へ使節を送った際、皇帝から授かったとされる称号と、その証として贈られたものの組み合わせとして適切なものはどれですか。 (2019年 広島県公立入試 類似)
- 倭王の称号と、仏教の経典や寺院の設計図
 - 親魏倭王の称号と、金印や百枚の銅鏡
 - 大王の称号と、鉄製の武器や農具
 - 漢委奴国王の称号と、金印
- 問4 弥生時代に製作された青銅器の一種で、兵庫県の上六ヶ所や島根県の五十ヶ所をはじめ、滋賀県や和歌山県といった近畿地方の府県で多くの出土が確認されている、豊作を祈るなどの祭祀に用いられた道具を何というか。 (2024年 京都府公立入試 類似)
- 勾玉
 - 銅矛
 - 石包丁
 - 銅鐸
- 問5 弥生時代の食生活の変化をまとめた資料では、この時期に稲作が広まったことが記されています。これと同じ時代、1世紀の日本の様子について述べた、中国の歴史書『後漢書』東夷伝の内容として正しいものを選びなさい。 (2022年 広島県公立入試 類似)
- 推古天皇の使者として小野妹子が隋に渡り、対等な外交を求めた。
 - 倭の奴国の王が後漢に使いを送り、光武帝から金印を授けられた。
 - 倭の五王が中国の南朝に使者を送り、朝鮮半島での軍事的地位を認めさせた。
 - 卑弥呼が魏の皇帝に使いを送り、「親魏倭王」の称号と金印を授けられた。
- 問6 弥生時代の社会において、大陸から伝わった「青銅器」と「鉄器」の使い分けに関する説明として、最も適切なものはどれですか。 (2016年 長崎県公立入試 類似)
- 青銅器は主に通貨として流通し、鉄器は主に古墳の副葬品としてのみ使われた。
 - 青銅器は祭祀の道具として用いられ、鉄器は工具や農具として用いられた。
 - 青銅器は書院造のような武家の住居を飾る装飾品として用いられた。
 - 青銅器は鋭い切れ味を活かして農具に、鉄器は祭祀の楽器に用いられた。
- 問7 弥生時代に朝鮮半島から稲作が伝来したことで、縄文時代とは異なる社会状況が生まれました。生産力の向上や定住生活に伴って発生した出来事について、適切に説明しているものはどれですか。 (2023年 茨城県公立入試 類似)
- 冠位十二階が定められ、個人の才能や功績に応じて役職が与えられた。
 - 狩猟や採集が中心の生活となり、人々は獲物を求めて常に移動し続けた。
 - 収穫した稲の分配や土地の所有をめぐる、むら同士の争いが発生した。
 - 仏教が伝来し、各地で大規模な寺院の建設が始まった。
- 問8 弥生時代の集落で見られる、地面を円形や方形に掘り下げて床を作り、そこに数本の柱を立てて屋根をかけた、当時の人々が生活していた一般的な住居形式を何といいますか。 (2018年 奈良県公立入試 類似)
- たて穴住居
 - 寝殿造
 - 合掌造り
 - 高床倉庫
- 問9 弥生時代に本格的に始まった稲作において、収穫の際に用いられた石包丁の使用法について説明したものとして、最も適切なものはどれですか。 (2017年 千葉県公立入試 類似)
- 土を掘り返して苗を植えるために用いられた
 - 稲の穂の部分を摘み取るために用いられた
 - 収穫した後の脱穀を行うために用いられた
 - 稲を根元から刈り取るために用いられた
- 問10 3世紀の日本の様子が記された中国の史書『三国志』の「魏志」倭人伝において、約30の国々をまとめ、中国の魏に使いを送ったとされる邪馬台国の女王は誰ですか。 (2025年 長野県公立入試 類似)
- 推古天皇
 - 持統天皇
 - 北条政子
 - 卑弥呼
- 問11 邪馬台国の女王卑弥呼に関する記述として、最も適当なものはどれか。 (2016年 北海道公立入試 類似)
- 夫である天皇の死後、軍を率いて朝鮮半島へ出兵したという伝説がある。
 - 魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号や多数の銅鏡を授かった。
 - 日本で初めて本格的な都城である藤原京を造営し、国家体制を整えた。
 - 摂政である聖徳太子とともに、冠位十二階や十七条の憲法を定めた。
- 問12 日本列島と朝鮮半島の位置関係を示した地図において、九州地方の北部（現在の佐賀県付近）に位置し、大陸との交流や当時の防御の様子を今に伝える弥生時代の代表的な遺跡はどれか、選びなさい。 (2020年 和歌山県公立入試 類似)
- 吉野ヶ里遺跡
 - 登呂遺跡
 - 三内丸山遺跡
 - 岩宿遺跡
- 問13 弥生時代に大陸から稲作とともに伝わった青銅器のうち、表面に幾何学模様や当時の生活・自然の様子が描かれ、釣鐘のような独特の形状をしている道具の主な用途として最も適切なものを選びなさい。 (2023年 三重県公立入試 類似)
- 豊作などを祈るための祭祀の道具
 - 土を耕し田植えをするための農業用の道具
 - 獲物を捕らえたり身を守ったりするための狩りの道具
 - 食料を保存し煮炊きをするための道具
- 問14 古代日本の生活文化について述べた次の文のうち、衣料に関する記述として正しいものを選びなさい。 (2026年 栃木県公立入試 類似)
- 弥生時代には稲作とともに綿の栽培も伝わり、民衆の服の多くは綿製であった。
 - 当時の技術では植物繊維を利用することができず、衣服のすべてが動物の皮で作られていた。
 - 古代の日本列島では乾燥した気候を活かした羊の飼育が盛んで、羊毛が主な原料だった。
 - 古墳時代の有力者は、麻のほかに絹を用いた衣服を身につけることもあった。

答え合わせ・解説

問1	答え 2 表面に当時の狩猟や農耕の様子、生活風景を反映した文様が刻まれている。	釣鐘型の青銅器は「銅鐸（どうたく）」と呼ばれます。その表面には、鹿を狩る様子や稲作の風景、高床倉庫などが描かれていることがあり、当時の生活を知るための貴重な資料となっています。古墳時代に作られた埴輪や、実用的な武器としての鉄器とは役割が明確に異なります。
問2	答え 1 銅鐸	銅鐸は、その形状から「鐘」のような役割を持っていたと推測されています。初期のものは音を鳴らすために小規模でしたが、時代が下るにつれて大型化し、村の祭りで見せるための宝物としての性格を強めていきました。
問3	答え 2 親魏倭王の称号と、金印や百枚の銅鏡	卑弥呼は239年に中国の魏へ使節を派遣しました。当時の中国は魏・呉・蜀が並立する三国時代であり、卑弥呼は北方の魏と結ぶことで外交的な後ろ盾を得ようとしていました。魏の皇帝はこれに応え、「親魏倭王」の称号とともに、その権威を象徴する金印や、当時の日本列島では希少だった銅鏡などを授けました。
問4	答え 4 銅鐸	弥生時代には、大陸から青銅器の技術が伝わり、日本では主に祭りの道具として独自に発展した。銅鐸は近畿地方を中心に、四国や中国地方からも多く発見されており、稲作の豊作を願う儀式などで使われたと考えられている。選択肢にある銅矛も青銅器だが、これらは九州地方を中心に多く出土する傾向がある。
問5	答え 2 倭の奴国の王が後漢に使いを送り、光武帝から金印を授けられた。	紀元1世紀、現在の福岡県付近にあったとされる「奴国」の王は、後漢の光武帝に使者を送りました。その事実、江戸時代に志賀島（福岡県）で「漢委奴国王」と刻まれた金印が発見されたことによって裏付けられています。3世紀の卑弥呼（魏志倭人伝）、5世紀の倭の五王（宋書）、7世紀の遣隋使（隋書）など、中国のどの王朝の時代に、誰がどのような目的で交渉したかを区別することが重要です。
問6	答え 2 青銅器は祭りの道具として用いられ、鉄器は工具や農具として用いられた。	弥生時代には青銅器と鉄器がほぼ同時に伝わりました。鉄は非常に硬いため、木を加工する工具や、土を掘り返す農具、実戦用の武器などの実用的な用途に主に使われました。一方で青銅は鉄よりも柔らかいため、銅鐸、銅剣、銅矛などのように、神を祀る儀式や祭りの道具として象徴的に使われるようになりました。
問7	答え 3 収穫した稲の分配や土地の所有をめぐる、むら同士の争いが発生した。	稲作の開始により、安定した食料生産が可能になり定住が進んだ一方で、水利権や肥沃な土地、蓄えられた稲をめぐる対立が生まれました。当時の遺跡からは、戦いに備えて集落の周囲に深い堀を巡らせた「環濠集落」や、木製の武器、矢じりが刺さった人骨などが発見されており、組織的な紛争があったことが分かります。
問8	答え 1 たて穴住居	弥生時代の集落において、人々の生活の場として最も一般的だったのがこの住居形式です。地面を掘り下げることで断熱効果を高めていたと考えられており、縄文時代から継続して用いられました。地面を掘り下げて床にする構造がその名称の由来となっています。
問9	答え 2 稲の穂の部分を摘み取るために用いられた	弥生時代前期の収穫方法である「穂首刈り」に関する問いです。当時は稲が実る時期が一定ではなかったため、実った稲の穂だけを一つずつ石包丁で摘み取っていました。根元から刈り取る方式は、後に鉄製の鎌が普及するまで一般的ではありませんでした。
問10	答え 4 卑弥呼	3世紀の日本（倭）では、多くの小国が争っていましたが、邪馬台国の女王である卑弥呼が呪術的な力を背景にこれらをまとめ上げました。彼女は239年に中国の魏へ使者を送り、外交関係を築いたことが『魏志倭人伝』に記録されています。
問11	答え 2 魏に使いを送り、「親魏倭王」の称号や多数の銅鏡を授かった。	『魏志』倭人伝には、卑弥呼が239年に魏へ使いを送り、その返礼として金印や銅鏡100枚を与えられたと記されています。他の選択肢は、それぞれ推古天皇、持統天皇、神功皇后に関連する内容であり、卑弥呼の事績ではありません。
問12	答え 1 吉野ヶ里遺跡	弥生時代に現在の佐賀県に築かれた、大規模な環濠集落（かんごうしゅうらく）の跡です。物見やぐらや二重の濠、大規模な墳丘墓などが発見されており、クニの成立過程や大陸との交流を研究する上で極めて重要な遺跡です。静岡県登呂遺跡や青森県三内丸山遺跡とは所在地や時代、特徴が異なります。
問13	答え 1 豊作などを祈るための祭りの道具	銅鐸は、弥生時代に青銅鏡や青銅器などとともに大陸から伝えられた青銅器の一種です。当初は音を鳴らすための実用的な鈴としての側面もありましたが、日本で発展するにつれて大型化し、集落の共同体で豊作を祈るなどの祭祀（まつり）に使用される宝器としての役割が強まりました。
問14	答え 4 古墳時代の有力者は、麻のほかに絹を用いた衣服を身につけることもあった。	弥生時代や古墳時代には、すでに麻や絹を織る技術が存在していました。特に身分の高い人物は、貴重な絹を用いた衣服を着用していたことが遺跡の出土品などから確認されています。綿（木綿）や羊毛（ウール）が日本の衣料の主流となるのは、中世以降や近代になってからのことです。